

上林曉全集 三

筑摩書房

上林曉全集 三

昭和四十一年四月五日發行

著 者 上 林 曉

發行者 竹之内靜雄

發行所 筑摩書房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話東京 〇七六五一（代表）

振替東京 四一一二三

印刷 多田印刷株式會社
製 本 矢島製本株式會社

上林曉全集第三卷目次

ふるさとびと	三
林檎汁	一〇
鮠のたより	三三
野	三〇
少女	六四
冬主義者	七
あかね食堂	八九
散歩者	九
花の精	一〇〇
妻の身	
1 葛の鉢	一三三

2 詩人先生	二六
身體髮膚	一三〇
湯宿	一四六
二閑人交游圖	一七〇
箸藏山	二二〇
悲歌	二二八
——ある作家の筐底原稿——	
町子	二五四
玄關抄	二六二
村夫子	二七六
田舎醫者	二九八

殴られた経験	三二四
貧窮問答	三三三
侘日記	三四五
流寓記	三七〇
童女像	三八六
歴史の日	三九六
寒別れ	四〇七
書誌	四二七

小說
三

ふるさとびと

先頃田舎の妹が手傳ひに上京して來て、久しぶりに故郷の消息を聞くことが出來た。僕はのところ長く、故郷の方とは疎遠にして暮して來た。文學の世界に深く没入すればするほど、肉親だとか親戚故舊だとかとの係り合ひがだんだんうるさく、心を重くするので、自然彼等から遠ざかり、ただ文學の仲間のつくる世界にだけ住み、その世界に住んでゐるかぎり、自由に、氣安く息づいてゐられるやうに感ずるのだつた。最近ではまた、その文學の仲間のつくる世界さへ煩はしく、どこか草深い田舎か木深い山の寺などに獨り住んで、靜かに創作三昧に耽りたいとすら思ひ勝ちであつた。だから、この頃では故郷のことなど思ひ出さうともしなければ、思ひ出したくもなかつた。それなのに、田舎訛りの妹の話を聞いてゐると、忽ち故郷が身近かに生きて動きはじめるのであつた。僕の故郷厭惡など少しも根がなくて、みんな我が儘勝手なエゴイズムに過ぎないのだと、我ながら愛想が盡き、自分のお目出度さに呆れるのだが、それはまた故郷といふものの持つ不思議な力と言はねばなるまい。僕は手もなく故郷の擒となり、妹の語る消息に、或る時は頗笑みながら、或る時は心を暗くしながら、耳を傾けてゐるのだつた。

たとへば、僕の小さな弟が、青年訓練所の服を着てやつてゐると聞いただけで、弟に對して言ひやうのな

い懐しさを覺えた。弟は僕が大學一年の時に生れ、二十二違ひである。父は毎晩晩酌を二合づつ飲んでゐて、肴の好いときは三合にすると聞くと、父に對する親しみが、新しく湧き起るのであつた。煤で黒くなつた茶の間の模様更へをしたと聞くと、茶の間と奥の間の間の板敷はどういふふうにしたのかと、そんな小さなことまで聞きかへさずにはゐられなかつた。

そのやうに、妹から故郷のことを一言聞くと、その一言が電氣鉋のやうな作用をして、僕の眼の前には、故郷の人達や風物などのパノラマが、忽ちありありと見えて來るのであつた。それは面白い手品のやうでもあつた。綿製品の配給のあつた日には、區長のところから觸れが出て、女たちが公會堂を指して押しかけて行くさうだ。その時のざわめきも眼に見えるやうだ。

僕が或る小説の中に書いた少年——「彼は九つだが、すでに老人のやうに腰が曲つてゐる。彼は暮のやうに這ひ歩いてゐるが、胸が切なくなるのか、ときどき右手を右膝に左手を左膝に當てて、老人がするやうによつこらしよと腰を伸ばし、額に皺を寄せて、大饑さうに息をつく。だが彼の腰は伸びきつてゐない。それからまたよちよち歩いて行く。高等小學校へ通つてゐる生徒の自轉車に乗りかけられ、脊骨が曲つたのだ。折れ口は背中の皮を突き破りさうに突き出てゐる」と書いた貧しい少年も、熱病で二三年前に死んださうだ。

さう言へば、僕が最近或る作品に書いた老人も、この六月頃死んださうである。六月と言へば、僕がその作品を書いた時分である。僕がその不幸な老人の面影を思ひ浮べながら紙の上に寫してゐた頃、その老人はこの世を去らうとしてゐたのか、それともこの世を去つてから間もなくのことであつたにちがひない。

それから佐平をぢといふひとは、今年の舊正月の餅搗きの日に、連合ひを腦溢血で亡くしてからといふもの、連合ひのことを思ひ出しては毎日泣いてゐたといふことである。すると僕は、四五年前郷里にかへつてゐたとき、或る酒盛の場所で、その佐平をぢが、獨り暮らしの老人たちをつかまへて冗談口を利いてゐたの

を思ひ出した。

「どうしても、や、め、でないといかんよ！」

と佐平をぢは言つたのだ。するとみんなが腹を抱へて笑ひころげた。や、め、や後家になつた老人たちは、大師講の寄合ひをしたり、御詠歌の稽古をしたりして、なんの屈託もなく、言はば老後に訪れた青春を楽しんでゐるふうに羨しく見えたのだ。

だが、佐平をぢは、七十近く、自分がや、め、になつてみると、大師講や御詠歌どころか、淋しくて、毎日シクシクと涙を拭うてゐたといふのだ。

一番面白かつたのは、（或ひは哀れだつたのは）松をぢの死ぬる前の話だつた。

松をぢは、父の姉の亭主だから、僕から言へば義理の伯父に當るわけだ。松をぢは赤松のやうに赭ら顔に肥つてゐて、鼻の下には口髭を貯へ、恰幅は立派で、一寸見には村の有志のやうに見え、事實酒事まふごとなどの中には有志らしい口の利き方をしてゐたが、話すことは辻褄が合はず、突拍子もないことを言つたから、誰も相手にしなかつた。中年の頃頭が少し變になつて、七十幾つで死ぬるまで、そのネズ狂つた頭は遂にもとの通りにかへらなかつた。仕事は人並以上に出来て、蠶を飼つたり藁仕事をしたりしてゐるところは、普通のひと少しも變らず、口を利きさへしなければいいんだが、口を開いた途端に馬脚をあらはすのだつた。

松をぢが東京見物に來たとき、僕はまだ大學の學生だつた。その時は、父に松をぢに、松をぢに附添つて來た従兄に、その他村の人が二三人で、僕の本郷の下宿でみんなが一緒に寝起きしながら、市内を限なく、吉原まで見物して歩いた。松をぢはいつも蝙蝠傘を持ち、皆の後についてヒョコヒョコ歩いた。一行はお伊勢講の籤に當つたのでお伊勢様に參拜し、それから東京までのして來たのだつた。道中、松をぢには喋舌らせてはいかんぞといふのが、一行の默契であつたらしい。松をぢに勝手に喋舌らせておいては、どんな恥を

掻くかも知れないからである。父の電報で、東京驛へ出迎へに行くと、一行に交つて松をぢが降りて來たときには、僕は少からず驚いた。松をぢがよくもここまでやつて來たものだと思つたし、松をぢをここまで連れて來るのは随分無謀のことのやうにも思はれた。それだけ、從兄の武太郎の心勞は並大抵のものではなかつたらしい。彼はまだ若いのに、額に皺を疊み、旅の疲れで蒼ざめてゐた。彼は一瞬間といへども、父親から眼の放せない氣持で、旅を楽しむ餘裕などなかつたと、あとになつて語つた。しかしそれだけ、父親に東京を見せたいと思ふ彼の念願は、一層切實に感じ取られるのであつた。それは、孝子武太郎と言へるほどのものであつた。恐らく彼の一生のうちの最も満足な思ひ出は、父親に仕へて東京を見せてやつたことであるにちがひない。

電車に乗つて本郷に向ふ途中、須田町のあたりを通つてゐると、松をぢは突然僕の方を向いて、「沖はどつちぞ」と訊ねた。混み合つた乗客が松をぢの方を振り向いた。從兄が松をぢの袂を引いた。しかし僕は構はずに、東の方を指さして、こつちの方になるだらうと言つた。僕の故郷で、海は東に當つてゐるので、沖と言へば、東といふことになるのだ。東京のまん中に来て、沖といふ辭を適用したのが、いかにも松をぢの言ひさうなことなので、僕は頗笑んだ。

或る晩みんなで帝劇へ芝居を見に行つた。出し物は、「洛北の秋」や「勸進帳」や「義經千本櫻鮎屋之段」などで、羽左衛門や幸四郎や宗十郎などが出演してゐた。「義經千本櫻鮎屋之段」が始まると、松をぢは僕に向つて荒筋を話し、芝居の間も、今度はお里が出るとか、今度はいがみの權太が出るとか、科白交りに語り聞かせるのであつた。松をぢは昔の人だから、歌舞伎のことに詳しいのだと思ひながらも、科白まで語んじてゐて口吟むところを見ると、僕はなんだかいつもの松をぢとはちがふやうな氣がして松をぢの顔を見直さざるを得なかつた。あとで聞いてみると、松をぢは若い時、村の芝居に出て、鮎屋のお里に扮したことが

あつたのださうだ。そして綺麗であつたさうだ。この人が昔女形をやつたことがあるのかと思ふのも奇異な感じだつたが、その時覚え込んだ科白が、頭を病んだ今も口を衝いて出るのも不思議であつた。松をぢは好い機嫌で、僕を相手に喋舌つてゐたが、従兄があたりに氣兼ねして、「黙らつしやれ」と耳に口をつけていふと、不服さうに黙つてしまつた。幕があくと、ああ、見事な衣裳ぢや、と言つて松をぢは感嘆の聲を放つた。

芝居がはねて、下足場へ降りた時、父が履物の束から自分の下駄を取らうとすると、「俺が先ぢや」と言つて、松をぢが蝙蝠傘の尖で父の横腹を突いたらしい。今まで神経病みだと思ひながら義兄のすることを大目に見て來た父の肚に、これはひどくこたへたらしい。本郷の下宿にかへつて來るや否や、父は血相を變へ、「武太、お前等親子はここから出て行てくれ。どこでも勝手に宿を取れ。ここは、俺が金を出して龍雄に借りした家ぢやけん、お前等親子を泊らすことは出來ん」と、無慈悲に言つた。従兄は叔父の前になだ首垂れて唾を呑むきりであつた。「早う出て行てくれ、下宿屋なり、宿屋なり、どこでも勝手に宿を取れ」と父は疊みかけた。

松をぢ親子の姿が、その時くらゐ哀れに見えたことはない。無體なことを言ふ父に對して、松をぢ親子を守つてやらねばならぬと思ふ、一種の正義感に似た感情が若い僕の胸に湧いた。僕は自らの悲愴感に酔ひながら、「お金はお父さんが出しても、僕が借つた室だから、そんなわけにはゆきません」と言ひかけると、胸が熱くなり、涙は臉に溢れ、あとをつづけて言ふことが出來なかつた。

結局、他の人たちが父をなだめて呉れて、その夜は皆が枕を並べて寝たことであつた。

松をぢについては、あの東京見物のことが一番忘れられない思ひ出だ。松をぢにとつても一生のうちで一番大きな、劃期的な出來事だつたにちがひない。劃期的といふのも、強ちこじつけではない。事實、それま

では、二言目には直ぐ高知の城下の話をしてみなに響盛されたものだつたが、その時を限りとして、今度は二言目には東京の話をして、またみなを響盛させはじめたのであつた。僕が田舎へかへると、すぐ東京の話を持ち出して来て、東京のことを語りたいらしかつたが、その記憶は支離滅裂であつた。

去年の秋、松をぢ死亡の電報を父から受け取つた時も、僕は直ぐあの東京見物のことを思ひ出した。脳溢血で二三日患つたきりで死んだのださうだ。

ここで妹の話に還れば——松をぢの死ぬる十日ばかり前が、隣村の賀茂神社の大祭だつた。郷社の祭だから、近郷近在、みな自分の村の祭よりも楽しみにしてその日を待つ。松をぢの家では、伯母を初め皆が、爺（松をぢをさう呼んでゐた）にその日を知らせると、一緒に行きたがつてうるさいから、爺には知らせまいぞと謀し合せ、當日になると、松をぢだけ一人残して、皆抜け駆けにこつそりと祭へ出かけて行つた。あとに残つた松をぢは何も知らず、いつもの通り、納屋に籠つて、せつせと俵を編んでゐた。そこへ近所の人が通りかかつて、「松をぢ、今日に賀茂祭へ行かんかえ」と誘ひの聲をかけたものだ。すると松をぢは驚いて飛び上り、「さうかねえ、今日が賀茂祭か。そんなら、行かにやいかん。俺アちつとも知らつたけんねえ」と大狼狽で支度して、出かけたといふ。帽子を阿彌陀にかぶり、杖をつき、尻端折つて、腰に手拭を差し、大慌てに飛び出して行つた松をぢの姿が、僕には眼に見えるやうであつた。賀茂神社の境内に着くと、松をぢは人ごみのなかで伯母の姿を見つけ出し、伯母の側へ寄つて來たかと思ふと、オイオイと聲をあげ、涙を流して、泣きはじめたといふ。

「爺、なぜ泣きやえ？」と伯母が聞くと、松をぢは手拭で涙を拭きながら、

「俺ア、もう今日來らつたら、賀茂祭には一生來れんと思つてねえ、慌てて來とよ。」と言ふのであつた。その涙は、一人取り残された者の悲しさの涙とも取れば、今生の祭に間に合つた喜びの涙とも取れよう。

松をちが仆れたのは、その祭の出来事があつてから直ぐ後のことであつた。

妹に聞けば、今日は陰暦の八月十五日で、故郷では盆に當るさうだ。僕は妹に言つて、牡丹餅をつくらせることにした。牡丹餅をつくつて重箱に入れ、松をちの家やその他、近しい親類に配るのは故郷の盆の習はしだ。

妹が上京して以來、眠つてゐた故郷の情感がふたたび僕の身内しんないで動きはじめたやうだ。

（昭和十四年九月）

林檎汁

今度は、武吉が、勝部氏から同情されるやうな立場になつた。或晩、勝部氏は玄關から座敷へ通るなり、「氣の毒ですなア、氣の毒ですなア」と繰り返へしながら、爪先歩きでそろつと座敷を通り抜けると、縁端へ行つて腰をおろした。「氣の毒ですなア」を連發するほかには、その場の光景を形容する言葉がないらしい風であつた。

その場の光景といふのは、積木のいつぱい散らかつた座敷に、武吉が小さな幹子を抱いて坐つてゐて、そのそばには、廣い掛蒲團を敷蒲團代りに敷いた上に、武吉の上の子供達が二人、狼藉たるさまで寢轉つてゐるのだつた。姉の實枝は學校着の洋服のまま、脛をひつかがめ、右を下にして、蒲團の上端に寄つて寢てゐた。弟の行郎は實枝の足元に斜になつて、タオル地の寢巻で、俯伏せに寢てゐた。彼の投げ出した脚は、埃と汗で黒ずんでゐた。それは今夜に限つた寢様ではないので、武吉にはさして特別の感じもないのだが、それを初めて見る勝部氏には、なんとも言ひやうのない感動であつたらしい。武吉の妻の恭子は、もう一週間も前から、暑さと衰勞のために倒れて寢てゐた。茶の間との間の襖が一尺ほどあいてゐて、蚊帳の端が見えるのは、恭子がそこに寢てゐるのだつた。だから勝部氏は、武吉の膝に抱かれてゐる小さな女の子や、遊び